

<コラム> ピアノのお稽古経験はようやく日の目を見るか？ ストリートピアノ

聖路加国際大学大学院看護学研究科・准教授 歌川 光一

1. 「実は昔・・・」

筆者は昨年、近代日本におけるピアノ、箏、三味線と女子のジェンダー規範の関連を扱った『女子のたしなみと日本近代 音楽文化にみる「趣味」の受容』（勁草書房、2019年）を上梓した。そのことで、「実は昔、私（の家族）も、〇〇を習っていたんです」と、音楽の稽古事・習い事について話かけられることが多くなった。「実は昔・・・」と切り出す時点で、今は何らかの事情でレッスンを継続していないという含意が既があり、そして大抵の場合、厳しかった先生やどんな曲を弾いたかというレッスンそれ自体の思い出話から始まる。コンクールや温習会で緊張したという話題に到達するまではかなり話し込む必要があるし、まして家庭で敢えて場を設定して親や友人に聞かせたというような話は聞いたことがない。

生涯音楽学習を含め、生涯学習・社会教育実践として「趣味」の存在をとらえる視点については本誌でも触れたことがある（拙稿 2020）。「趣味」をみる視点として、習い覚え、鍛錬する「修養として趣味」から、発表それ自体を目的とする「発表する趣味」への力点の移動や、その接続は一つの論点となっている。

2. 日本におけるストリートピアノ

ここ数年、日本のマス・メディアや SNS でも話題になっているストリートピアノ（「街ピアノ」「駅ピアノ」「空港ピアノ」などとも呼ばれる）の動向は、「発表する趣味」観の広がりとも受け止められるかもしれない。

2018 年度末には、「Play Me, I 'm Yours Kunitachi 2018」が、国立市市制施行 50 周年記念事業、くにたちアートビエンナーレ 2018 関連事業として行われた（<https://streetpiano.skunitachi.tokyo/> 2020/9/29 最終閲覧。以下同様）。「Play Me, I 'm Yours」プロジェクトとは、イギリスのアーティスト、ルーク・ジェラム（Luke Jerram）によって考案されたもの

で、「会話が生まれるきっかけをつくる触媒のような働き」を期待し、誰でも弾けるように通りにピアノを置くというものである。既に世界中の 65 以上の都市に、2000 台以上のストリートピアノが設置され、多くの人も巻き込むプロジェクトとなった (<http://www.streetpianos.com/>)。ギター、サックスなど何か楽器が弾ける場合、そばに行ってピアノと一緒に演奏できるように、との意図も込められている。そして、プロもアマチュアも誰でも弾けるようピアノは置かれる。国立市の「Play Me, I 'm Yours Kunitachi 2018」では、2018 年 3 月 16 日から 31 日まで誰でも弾けるピアノが、イベントスペース、駅ビル、カフェ、大学、商店街、公園、市役所広場などに 10 台設置された。

東京都庁においても、第一本庁舎南展望室がリニューアルオープンした 2019 年 4 月に「都庁おもいでピアノ」が設置された (<https://www.koho.metro.tokyo.lg.jp/diary/report/2019/04/08/01.html>)。南展望室の開室時間中に「演奏タイム」が設定され、希望する来室者の演奏が可能になっている。予約は受け付けておらず、一人当たりの演奏は 5 分までである。COVID-19 の感染拡大の影響を受け、しばらく展示のみとなっていたが、2020 年 10 月からは、演奏前後の手指消毒、演奏順番待ちの並び列や観覧場所でのソーシャルディスタンス確保、集客を目的とする SNS 等での演奏日時の予告の禁止などの対策の上で、再開見込みである (国内の主なストリートピアノについては、青柳 2019 など参照されたい)。

NHK では BS 番組「駅ピアノ・空港ピアノ・街角ピアノ 誰でも自由に弾けるピアノ 人々が紡ぐ“一期一会”の音楽。」も放映中である。世界の空港・駅・街角に置かれた「自由に弾けるピアノ」に設置された定点カメラが捉える人々を、ノーナレーションで伝えている。初の国内編は、神戸のベッドタウンにある西神中央駅構内に置かれた、閉園した幼稚園から譲り受けたグランドピアノに関わる人々の様子が伝えられた。

ストリートピアノ向けの楽譜も既に販売されている。『ピアノ連弾上級×上級 魅せる聴かせるショート連弾 - ストリートピアノにもピッタリ』(ヤマハミュージックエンターテイメントホールディングス、2020 年) では、上級者の連弾が映えるように「指示通りのテンポで演奏した場合、どの曲も演奏時間は“2 分 30 秒”以内!!」にアレンジされている。確かに、「都庁おもいでピアノ」で 2 曲披露できる長さである。

3. 「ピアノのお稽古経験」の行き場

レッスンを継続していない「ピアノのお稽古経験者」は、時折思い出して一人で弾いたり、「実は昔…」と話の種にしたりしてきたかもしれない。また周囲も含め、稽古事・習い事を通じて「継続力がついた」「友人が増えた」といったようなインフォーマルな効果を

肯定的に受け止めてきたかもしれない。「ピアノを弾けば頭が良くなる」という類の言説も世の中に溢れている（井上 2008）。

ストリートピアノの広まりは、行き場が拡散していた「ピアノのお稽古経験」それ自体の価値の再発見につながっているようにも思える。また、一般市民と、音楽大学生や YouTuber などのセミプロとの交流の場ともなっている。コロナ禍で途絶えないことを願うばかりである。

付記

本稿の執筆にあたり、「昭和期日本における家庭を通じた遊芸文化伝承に関する実証研究」（前川財団 2019 年度家庭教育研究及び実践助成）の助成を受けた。

引用・参考文献（二次資料）

青柳雄介（2019）「私たちのサウンド・オブ・ミュージック 街角のピアニストたち 「ストリートピアノ」が全国で急増中」『サンデー毎日』98（60） pp.122-124.

猪股英紀（2020）「世界のメディア曼陀羅華（第 214 話）"一人だけの世界"をのぞく楽しさ ミニ番組：空港ピアノ・駅ピアノの魅力」『B-maga』19（6） pp.26-29.

井上好人（2008）「幼児期からのピアノレッスンによって身体化された文化資本のゆくえ」『金沢星稜大学人間科学研究』2（1） pp.1-6.

歌川光一（2020）「シリアスレジャー時代の生涯音楽学習」『音楽文化の創造（CMC）電子版』Vol.11.